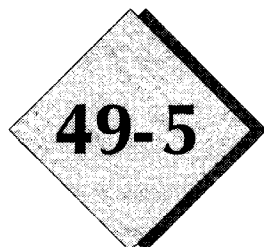


2007年 12 月

昭和55年11月20日 第4種郵便物認可

ISSN 0388-7464

No. **236**



論 説

アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割
— 総合地理研究会と陸軍参謀本部 —

柴田 陽一 1

研究ノート

難波からの北上路

— 8 世紀の淀川河口部と三嶋路の復原 —

上遠野浩一 32

明治・大正期における北海道鯨漁出稼ぎ漁夫の動向

— 菊地久太郎の出稼ぎ記録より —

服部亜由未 54

書 評

日外アソシエーツ編

『CD- 県史誌 2 関東—近現代（通史／資料）編』

天野 宏司 69

大西健夫・堤清二編『国立の小学校』

鷺崎俊太郎 72

水内俊雄編：シリーズ人文地理学 8『歴史と空間』

上原 秀明 77

■ 第 50 回（平成 19 年度）大会および総会報告

■ 第 212 回例会記録

学会記事

歴史地理学会

第50回（平成19年度）大会および総会報告

本年度の大会および総会は、5月20日（日）に國學院大学渋谷キャンパスで開催された。午前より2会場に分かれて自由論題16の研究発表があり、引き続き総会と懇親会が開かれた。

なお、大会運営の労を惜しまれなかった大会実行委員会の各位ならびに研究発表会で座長を務められた方々に深く謝意を表します。

開催期日：平成19年5月20日（日）

会場：國學院大学渋谷キャンパス（東京都渋谷区東4-10-28）

大会スケジュール

- 10：30～12：00 自由論題発表（2会場、120周年記念2号館3F 2303教室・4F 2402教室）
- 12：00～13：00 評議員会（120周年記念2号館5F 2502教室）
- 13：15～15：15 自由論題発表（会場、120周年記念2号館3F 2303教室・4F 2402教室）
- 15：30～16：30 総会（120周年記念2号館3F 2303教室）
- 17：00～19：00 懇親会（若木タワー18F 有栖川宮記念ホール）

研究発表プログラム 5月20日（日）10：30～15：15

第一会場（自由論題）

- 101 長谷正紀（近畿大附和歌山高）：紀伊国根来寺周辺の中世道路について
- 102 末田智樹（中部大）：江戸中後期における捕鯨業地域の発展
ー西海地方の鯨組による藩政経営の確立ー
- 103 有蘭正一郎（愛知大）：近世後半以降の信濃国庶民の日常食
- 104 鳴海邦匡・小林 茂（大阪大）：近世の里山景観研究における正式2万分1地形図の意義について
- 105 松尾 宏（㈱日水コン）・小林寿朗：明治43年利根川洪水と中条堤およびその後の変化について
- 106 清水克志（筑波大・院）：近代日本における野菜種子流通の展開
ー盛岡近郊の種子屋大福帳の分析を通してー
- 107 品田光春（日本大・非）：大正期における日本の石油鉱業者とその所有鉱山の変遷
- 108 山田 誠（京都大）：『土地概評価』に描かれた大震災直前期の東京

第二会場（自由論題）

- 201 山田志乃布（法政大）：松浦武四郎の地誌・地図作製とアイヌ民族ー『天塩日誌』を素材としてー
- 202 柴田陽一（京都大・院）：植民地高等教育機関における地理教育の夢と現実ー宮川善造を中心にー
- 203 米家泰作（京都大）：朝鮮半島における史蹟景観と植民地主義
- 204 宮本真二（滋賀県立琵琶湖博）・安藤和雄（京都大東南アジア研）：
アッサム・ヒマラヤにおける土地開発過程
ーインド、アルナチャール・プラデーシュ州の事例ー
- 205 川西孝男（神戸大・院）：ドイツ絶対主義時代にみられる湖沼利用
ーブランデンブルク・バイロイト辺境伯の“理想郷”ー
- 206 平岡昭利（下関市立大）：北西ハワイ諸島における1904年前後の鳥類密漁事件
ーバード・ラッシュの一コマー
- 207 三木一彦（文教大）：フランスにおける地域言語の展開
- 208 喜多祐子・山口 覚（関西学院大）：現代スコットランドにおける系図学ブーム
ー家族史協会の設立と先祖ツーリズムを中心にー

た。この領邦文化を牽引したのが、ブランデンブルク・バイロイト辺境伯ゲオルク・ウィルヘルムと領邦内の湖沼ブランデンブルクである。

16世紀初頭にマイン川の支流を引いて作られた大きさ約1.5km²のこの湖沼は当時、“ブラン・ベルガー沼池”と呼ばれ、市民に飲料水や養殖鯉といった貴重な水資源を供給した。ところが三十年戦争で破壊されて干上り、その歴史を閉じたかに見えた。しかし、時の辺境伯クリスティアン・エルンストが沼池を再建し、名を“ブランデンブルク沼池”と改め、辺境伯直轄としたことで、沼池は絶対主義時代のバイロイト宮廷とつながりを持ち、幼き辺境伯皇太子ゲオルク・ウィルヘルムもこの沼池で遊び、見果てぬ海洋への夢を募らせた。

この皇太子は少年時代、外交見聞を兼ねた英国への渡航で生涯を決定づける体験をし、帰郷直後の1695年、沼池を“ブランデンブルク湖”と改め、岸辺を修復し、軍艦4隻を建造した上、兵士2千人を招集し、岸辺に塹壕や司令塔を作らせて軍事演習を開始した。これが“バイロイト海戦”と言われ、後に彼はこれを湖上オペラの域に高め、湖には直径100メートルの真円のバラ庭園をもつ波止場が設けられ、全長30m、12の砲門を持つ母艦「聖ゲオルク」などが停泊した。このように18世紀初頭のバイロイトでは領邦絶対君主たる辺境伯による壮大かつ華麗な湖上祝祭が行なわれていたのである。

またゲオルク・ウィルヘルムは、自らを竜退治伝説の守護聖人聖ゲオルクに讃えて、湖を中心とした都市ザンクト・ゲオルゲンを設立し、自らの“理想郷”を完成させた。この湖沼の恩恵は大きく、彼の治世に水資源を用いた高級陶磁器、ビール、レンガ工場などといった大型地場産業も発展するなど、これ以降、バイロイト辺境伯の宮廷都市文化はブランデンブルク湖とともにヨーロッパ屈指の繁栄を遂げることになる。

205. ドイツ絶対主義時代にみられる湖沼利用 ーブランデンブルク・バイロイト辺境伯の “理想郷”ー

川西 孝男（神戸大・院）

ヨーロッパの絶対主義に関する研究は戦後に転換点を迎え、その君主権の制約性や、実際に支配が及んだ地域あるいは領邦の研究にも重点が置かれるようになった。ドイツの絶対主義は領邦絶対主義として知られるが、とりわけバイロイト領邦は“閉鎖領邦”と位置づけられるように、領邦内で絶対主義が貫徹される可能性が高く、加えて辺境伯領として強力な軍事力の保持を許され、ドイツ絶対主義時代にバイロイトは大きな変容を遂げ